

2017年3月14日

助成研究題目「被害者はどのように振る舞ったのか——モンスターパニック映画における“死”の表現から——」

<調査目的>

モンスターパニック映画、特にB級と評価されているモンスターパニック映画には「モンスターに襲われた被害者」が必ず登場する。より強調するならば、モンスターパニック映画における「被害者」の存在は必要不可欠とも言える。また、モンスターが襲いかかってくる恐怖と共に、登場人物の中でどの人物が被害に遭い、ストーリー上の「犠牲者」となるかを予想する一種の謎解きのようなワクワク感を味わいながら視聴するといった楽しみ方も可能であるが、実際にはどの程度の割合の視聴者が、このような謎解き感や予想を楽しみながら視聴しているのだろうか。

例えば、1975年に公開されたスティーブン・スピルバーグ監督の『ジョーズ』では、おどろおどろしいBGMの中、女性の悲鳴が響き渡り、海が血の色に染まることから物語が始まる。主要登場人物は三人のみで全員男性である。それぞれに個性があり、関係性や人となりがわかりやすいキャラクター構成となっている。シンプルなストーリー構成にも関わらずサメに襲われる恐怖を視聴者に植え付けるのに十分過ぎる演出は大きな衝撃をもって話題となった。また、同監督による1993年公開の『ジュラシック・パーク』は、恐竜を復活させることに成功したテーマパークで繰り広げられる壮大な物語であり、現実味のあった『ジョーズ』とはまた違った衝撃とともに、モンスターに襲われる恐怖を表現したと言える。

このような恐怖はどこから来るのだろうか。体験したことのない、いわゆる未知との遭遇が言い知れぬ恐怖として襲いかかってくるというシチュエーション表現からかもしれない。しかし同じタイプの作品を数多く視聴する人であれば、自分自身が無意識のうちに嵐の前の静けさのような「これから襲われそうな雰囲気」と、その雰囲気の不気味さを感じ取っていることが予想され、その予感にこそ恐怖を覚えるのではないだろうか。そしてこの「無意識の予想」は、物語が進む中で印象付けられた登場人物たちの性格や行動から判断して立てられているのではないかと考えた。

冒頭でも述べた通り、モンスターパニック映画には必ず「モンスターに襲われた被害者」が描かれている。そこで、本研究ではB級と評価されるモンスターパニック映画とその被害者達を取り上げることにした。被害者たちの共通点と相違点を分析し、その結果を元に、登場人物の特徴が視聴者に対してどのような印象を与えるかを考察していく。加えて質問紙も作成し、導き出した登場人物の特徴から視聴者が受け取る印象は実際に考察結果と一致するのかどうかを調査する。

## <調査方法>

### 内容分析

14 作品の B 級モンスターパニック映画を視聴し、被害者と被害パターンを分類し、被害内容・場面設定・登場人物の属性などによる内容分析を実施した。その内容分析の結果について、統計ソフトである SPSS を利用してクロス集計分析とカイ二乗検定を行い、設定した項目間の関連性について検討した。

### 質問紙調査

内容分析の結果を元に「被害に遭いそうな人物の特徴や被害状況」を文章化したものを質問項目として構成し、成城大学の学生を対象として質問紙調査を実施した。そしてその結果を元に、視聴者は実際にどのような特徴の人物あるいは被害状況から「被害に遭いそうな人物」を予想するのかを考察した。

## <結果・考察>

### 内容分析

犠牲者が襲われるシーンでは、陰気な性格のキャラクターは死亡しやすい、アクティブに行動するキャラクターは死亡しやすい、複数で行動している時にモンスターに襲われやすい、朝の時間帯は死亡者が出にくい、マイナスな行動を取ると死亡しやすいなどの傾向が明らかとなった。

### 質問紙調査

死亡しやすいと予想されるキャラクター像やシチュエーションに関して、陰気な性格をしている人物や逆にアクティブな性格は死亡しやすいと予想されていた。また単独行動をする、あるいははぐれて一人になってしまったなどのシチュエーションでは死亡しやすいと予想されていた。

しかしこの質問紙調査から得られた死亡が予測される状況は、実際の内容分析とは異なる点が見出された。例えば、実際の集計結果では、複数で行動している時の方がモンスターに襲われやすく、死亡者も出やすいという結果が見られた。視聴者の予測と反する結果になったのは、単独行動を取るキャラクターの自己中心的な態度が、死にやすいイメージが抱かれている陰気な性格のイメージと結び付いたためと考えられる。さらに危機的状況に立たされている時にはぐれるというのは、視聴者の不安感を煽り、恐怖を増幅させる効果があるため、視聴者の記憶に残りやすく、このような結果として表れたのだと考える。

## <卒業論文を通じて>

本研究を行うにあたり、今まで娯楽として鑑賞してきたモンスターパニック映画を分析対象としてコーディング内容と照らし合わせながら細かく見ていかなければならず、加えて死亡フラグについて詳しく書かれた書物もないため、漠然と主観的に楽しんでいたもの

を客観的に定義し直すことの難しさを感じた。しかし、主観的に捉えていた死亡フラグというものに共通点を見出し、さらに質問紙調査によって一般的な映画の視聴者はどのような観点から死亡フラグというものを感じ取り定義しているのかを至極真面目に考えることの面白さも感じる事ができた。死亡フラグという俗的な概念ひとつとっても、突き詰めて研究しようとするれば一筋縄ではいかないことを知り、研究対象に真摯に向き合うことが如何に重要であったかを実感したと同時に、これから向き合っていくであろう人生経験のひとつとしてこの一年の経験を大切にしていきたい。

<謝辞>

最後に、この度、私の研究に奨学金を給付して下さった、故川上宏先生とそのご家族、関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。